

「花咲く大地の国」から

ビルマ・カレン族の子どもたち

生まれたときから民族生存の闘争があつた。いまだ祖国の土さえ踏んだことのない、難民キャンプの子どもたち。銃・弾薬を持つて前線を行き回り回る子どもたち。そして、山の中で山岳民族として生活する子どもたち。その形はちがつても、誇り高きカレン族の伝統・文化を受け継ぐこととする子どもたちには変わりはない。

「明日、いよいよ村へ帰れるんだ」

ビルマ軍と反政府軍とが戦闘を続けている最前線の兵站地をまかされている若い兵士のソ・タ・ペーはうれしそうに言った。

「もう戦争はしたくない。村へ帰つて農業に専念するんだ」

昨日の晩、ろうそくの小さな炎の下で彼は語つてくれた。

戦闘があまり激しくない雨期にこの兵站地を訪れた折り、二〇人近い若いカレン女性たちが看護婦になる訓練を受けていた。彼女たちの姿を一人ずつ写真に撮り、つぎに訪れるときにその写真をプリントして渡す

約束をしていた。だが、戦闘が始まる乾期にこの地を訪れてみると、写真を撮つた彼女たちはそれぞれの前線に散らばつており、宿舎となつていた建物はもぬけの殻になつていた。彼女たちの姿がアップで写つていた多くの写真は行き場を失つてしまつた。

前線にいた何人かの兵士たちとその写真を見せていくうちに、ソ・タ・ペーという若者が写真の中に自分の彼女の姿を見つけた。

「彼女たちの行つた先はわかつている。写真は届けてあげよう」と言つてくれた。

それがきっかけとなつて彼と夜遅くまで話し合う機会を持つようになった。志願制をとつている反政府組織のカレン民族軍にどうして自分が参加したか一自分の村、メ・ポタではみんな平和に畑仕事をしていたが、政府軍がやつてきて、カレンといふだけで略奪や暴行を繰り返していった。そのため多くのカレン人が難民となつてタイに逃げ込まなければならなかつた。自分はカレンの人を守るために武器を取る道を選んだ。

我々は自分たちの土地を軍事政権が名付けた「ミャンマー」と呼ぶことはできない。本当のところ、この土地は、ミャンマーでもなく、ビルマでもなく、コートレイ(カレン語で「花咲く大地」の意)ということも説明してくれた。

彼は数日前から、後退の友人が来るのを辛抱強く待つていた。約束の日を、二、三日過ぎると、心配そうな顔をしながら、「正直言つて、友人に早く来てほしい。だが、彼にも何か理由があるのだろう」と言つて、再び前線のパトロールへと出かけて行つた。

このティムタ基地の責任者、トゥ・ラ・ワー司令官はラングーン(ヤンゴン)大学で哲学を専攻したインテリだ。だが、今は無線機を片手に最前線の兵士たちに的確な指示をおくる軍人である。

「おまえは大学へ行つたのか?何を勉強した」としつこいほど「学業」のことを聞いてくる。

「機会があれば勉強を続けたかったのだが、もう四〇を過ぎた年齢にもなるとその望みはなくなつた」と語る。そして、今はマラリアで苦

しむカレンの子どもたちの行く末を案じ、パトロール中地雷で片足を失い、三日がかりで山から運びおろされてきた少年兵の体を心配し、何よりも、子どもたちに十分な教育機会がないことに心を痛めていた。

彼は、カレンの子どもたちに読み書きを教えるため、毎晩ろうそくの灯りのもと、聖書の朗読を続けていた。

戦闘が行われる最前線で「死」と向かい合うことになり、あらためて「生きのびたい」という欲望を再認識できた。サルウィン河を流れる死体も見た。だが、それよりも、「殺されるかもしれない」という恐怖心を生まれて初めて感じさせられた出来事があった。

北のウナダでの最前線。いつものように案内してくれるガイドはいない。英語を話す者もない。日が暮れるとすぐに一人で寝ることになった。真夜中近く、葉の「カサカサ」とすれあう音と、「ペタペタ」という足音で目が覚めた。「もしかしたら政府軍がやってきたのではないか」と思い、背筋に冷たい者を感じた。自分の心臓の音が「ドクン、

ドクン」と鳴っている。政府軍との距離は約五〇〇メートル弱。果たして、カレン兵のパトロールの足音か、あるいは政府軍の兵士の足音か。もし、政府軍につかまれば殺されても仕方ないだろう。その音が通り過ぎるまでの一、二分が三十分にも感じられた。

「よかった。一緒にいたカレン兵の見回りだった」
その安堵感は今でも忘れられない。

タイ・ビルマ国境のジャングル生活は想像以上に厳しい。雨期は毎日、気の滅入るような長雨が続き、いつマラリアにかかるかもしれない心配に悩まされる。靴に入れていた望遠レンズは、一週間使わなかっただけで、レンズの中がカビだらけになっていた。乾期は、日中は汗がでるほど暑い、夜から朝方にかけて、眠れないほど寒くなる。寒さに震えながらも、前線にいるカレン兵たちはテクー（腰巻き）と草履姿で生活している。

一月初旬、反政府組織の総司令部マナプロウには新しいゲストハウスが完成しつつあった。いよいよ和平

交渉を迎える準備に取りかかっているとこの印象だった。四十六年にも及ぶ戦争に終止符が打たれるのか。

ソ・タ・ベ、君はもうメ・ポタ村へ帰って新しい生活を始めているのか。トウ・ラ・ワー司令官、離れて暮らしている家族と再会することができたのだろうか。そして、最前線への道中、自動小銃をかついで護衛にあたってくれた子どもたちよ、安心して眠れる夜を迎えることができるのだろうか。

平和とは「概念」ではなく、「生活」そのものなんだとつくづくと思った。政府軍が展開しているカレンの村では、明日の朝の天気心配をするより、今晩いかに安心して眠ることができるか考える方が重要なのだ。